

早稲田大学審査学位論文

博士（人間科学）

概要書

トラウマの致死性の有無に着目した
外傷後ストレス様症状の認知行動モデル

A Cognitive-Behavioral-Model for Posttraumatic Stress
Disorder-like Symptoms following Traumatic Events with
or without Experiences of Threatened Death

2011年1月

早稲田大学大学院 人間科学研究科

伊藤 大輔

Ito, Daisuke

研究指導教員： 鈴木 伸一 教授

本研究の目的は、非致死性トラウマがトラウマ関連症状に及ぼす影響について検討を行い、非致死性トラウマによって、重度の外傷後ストレス様症状が生じる背景にある要因やその過程の特徴を明らかにすることであった。

第1章では、トラウマや外傷後ストレス症状に関する国内外の基礎研究や臨床研究が展望され、以下の2点が問題点として整理された。すなわち、(1)「生命の危険性を持たないものの、経験当時と同様の苦痛をもたらす出来事」である非致死性トラウマが、トラウマ関連症状に及ぼす影響が明らかでない、(2)非致死性トラウマによって重度の外傷後ストレス症状が生じるという背景にある要因が明らかにされておらず、トラウマ関連症状の表出に至るまでの過程が明らかにされていない、ことであった。このことから、非致死性トラウマによって重度の外傷後ストレス様症状を持つ者の病態や実態は不明な点が多く、有効な心理的援助は確立していないため、これらのことを解決すべく本研究が実施された。

第2章においては、問題点(1)を解決するために、非致死性トラウマが外傷後ストレス様症状および生活支障度に及ぼす影響を検討した。その結果、研究1では、非致死性トラウマによっても重度の外傷後ストレス様症状が生じることが確認された。そして、研究2では、非致死性トラウマによって生じた外傷後ストレス様症状の重症化に伴って、生活支障度も悪化することが示された。さらに、重度の外傷後ストレス様症状を有する者は、人間関係などの特定の領域においては中等度の機能障害が生じている可能性が示唆され、これらの対象者に対する心理的支援の必要性が示された。

第3～5章は、問題点(2)を解決するために、認知行動理論に基づき、非致死性トラウマによって重度の外傷後ストレス様症状が生じる背景にある要因やその過程の特徴について、致死性トラウマ体験者との比較から検討を行った。第3章では、認知的要因と外傷後ストレス様症状の関連について検討を行った。研究3において、既存のトラウマ体験後の認知尺度(PTCI)を用いて検討を行った結果、非致死性トラウマにおいて、「自己」、「世界に対する否定的認知」と外傷後ストレス様症状に比較的弱い正の相関がみられたものの、「トラウマに関する自責の念」には相関はみられなかった。一方、致死性トラウマにおいては、「自己」、「世界に対する否定的認知」、「トラウマに関する自責の念」と外傷後ストレス様症状に比較的強い正の相関を示された。次に、研究4において、外傷後ストレス様症状に対する否定的解釈を測定する尺度(NAP: 2因子構造; 症状の表出や維持に関わる自己の否定的解釈、症状の否定的予測と意味づけ)の作成を行い、ある程度の信頼性と妥当性を有するこ

とが明らかにされた。そして、NAPを用いて、外傷後ストレス様症状との関連を検討した結果、非致死性トラウマと致死性トラウマ体験者の両者に共通して、2因子ともに外傷後ストレス様症状と高い正の相関がみられた。

次に、第4章では、行動的要因と外傷後ストレス様症状の関連について検討を行った。具体的には、研究5において、トラウマや外傷後ストレス様症状に対するコーピングと、外傷後ストレス様症状との関連を検討した結果、非致死性トラウマと致死性トラウマ体験者の両者に共通して、「回避的思考」、「放棄・あきらめ」といった回避コーピングと中程度の正の相関がみられた。

そして、第5章では、3~4章で明らかにされた認知行動的要因が、外傷後ストレス様症状および生活支障度に影響を及ぼす一連の過程(モデル)について検討を行った。その結果、非致死性トラウマ体験者においては、NAPの「症状の表出や維持に関わる自己の否定的解釈」や「症状に対する否定的予測や意味づけ」、PTCIの「自己」、「世界に対する否定的認知」が、「回避的思考」や「放棄・あきらめ」といった回避コーピングの実行を促し、「外傷後ストレス様症状」に悪影響を及ぼすことで、最終的に「生活支障度」を悪化させることが示された。また、NAPの外傷後ストレス様症状に対する否定的解釈は、外傷後ストレス様症状に直接的に悪影響を及ぼすことから、NAPで測定される認知的要因に対する介入が有効である可能性が示唆された。一方、致死性トラウマ体験者においては、非致死性トラウマ体験者と比較すると、PTCIの「自己」、「世界に対する否定的認知」が回避コーピングの1つである「回避的思考」や「外傷後ストレス様症状」に及ぼす影響が大きかった。また、PTCIの「トラウマに関する自責の念」が、「回避的思考」の実行を促し、「外傷後ストレス様症状」に悪影響を及ぼすことが示された。このように、両者において、モデルに組み込まれた要因や要因間の関連については差異がみられ、両者の特徴を考慮した病態理解と心理的援助の必要性が示唆された。

第6章においては、本研究から得られた成果が整理され、非致死性トラウマ体験についてアセスメントを行う重要性や、非致死性トラウマ体験者に対して有効と考えられる心理的援助に関する示唆が述べられた。